



佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2014. 8. 28 佐久考古学会

■ 特集：北一本柳遺跡の韓半島南部産の板状鉄斧をめぐって

紀元前2世紀末～4世紀にかけて韓半島南部の三韓の一つ弁辰（弁韓）の状況を記した魏志東夷伝の“弁辰”条に「国出鉄、韓濊倭皆従取之；（訳）（弁辰）国は鉄を出す。韓・濊・倭は皆従い之を取る」とある。「市場での売買では鉄が交換されており、それは中国での金銭使用のようであった。」とも記される。佐久市北一本柳遺跡出土の板状鉄斧は、三国志記載の弁辰から弥生時代後期の佐久にもたらされた可能性が強い。

これをめぐって、本号では森泉かよ子・富沢一明・小山岳夫会員と高久健二氏、石川日出志氏の5人が検証する。

佐久地域北部で最大級の環濠集落を有する北一本柳遺跡

小山 岳夫

遺跡は、佐久盆地の湯川沿いに展開する岩村田遺跡群の西端にある。この地域には弥生中期後半栗林期の竪穴住居址が今までに279軒発見された巨大集落址が存する西一本柳・北西の久保・五里田遺跡が連なっており、北一本柳遺跡はその東に接する。

北一本柳遺跡には栗林期の遺構がなく、集落が営まれた主な時代は古墳時代に接近した弥生後期後半である。部分的な調査しかなされていないため詳細は不明であるが、佐久地域北部で最大級と目される環濠集落の存在が推定されている。北一本柳遺跡の環濠集落から西側に50m離れた場所にあたる西一本柳遺跡でもほぼ同時期の大きな環濠集落が営まれていたことがわかっており、この地域では、古墳時代前夜に佐久地域北部の中でも大きな環濠集落が併存あるいは連続して

営まれたことが判明している。

今回、焦点を当てる北一本柳遺跡出土の「板状鉄斧」は、弥生時代後期後半佐久地域北部で最も大きな環濠集落内に建造された竪穴住居の中でも最大級の大きさをもつH33号住居址から発見された。以下に、その発見の状況、時期・年代、佐久地域の弥生鉄器の出土状況、韓半島の類例、来歴などを探ってその意味付けを試みる。



図1 佐久地域北部 弥生後期遺跡分布図

板状鉄斧を出土した 北一本柳遺跡Ⅲと H33号住居の概要

森泉かよ子

遺跡の概要

北一本柳遺跡は、佐久市北部の岩村田にあり、東西に蛇行して流れる湯川の左岸、北の台地上にある。

浅間山南麓の田切地形末端にあたり、南は湯川により浸食をうけ断崖となっている。

この一帯は昭和43年から東一本柳遺跡、46年東一本柳古墳、47年に北一本柳遺跡Ⅰの発掘調査が行われ佐久の発掘調査が最初に行われた所である。

西隣にある西一本柳遺跡は現在ⅩⅧ次まで調査がなされ、弥生中期から中世まで連続と遺構がみられる佐久でも有数の遺跡である。

北一本柳遺跡Ⅲは平成18年から4年間にわたって原東1号線の道路開設に伴う発掘調査がなされ、弥生後期・古墳後期・中世の遺構が検出されている。竪穴住居址は弥生時代後期48棟、古墳後期11棟、中世57棟、掘立柱建物址は古墳後期1棟、中世9棟、土坑は弥生後期が7基、中世303基で井戸址を両時代にふくむ。溝は弥生後期11本あり、7本が環濠とみられる。その内環濠のM16・M17・M20は切りあいをもち、新しい順にM17→M16→M20となり、M16はM20を埋めて、新たに南北方向の環濠を掘っている。

また東側ではM26がM27を切って新たな深い環濠をもうけている。部分的で推測の域をでないものの、M16と関連し、細長くなったH61号住居、またはより方

形化したH56号住居等を囲んでいる。東西165mを測り、16棟の住居址が重複せずに同時期の土器を出土している。このうち2棟が焼失家屋で、H51号住居とH56号住居である。環濠のM16は最大幅310cm、深さ165cm、M26は最大幅260cm、深さ117cmを測る。

H51号住居は長軸残長で821cm、短軸長545cm、推定で864cmを測る長方形の住居址である。ここから出土した炭化豆はAD121-AD238という年代を放射性炭素年代測定で暦年較正年代をえている。

H56号住居の壺から出土した炭化米は、AD126-AD248という年代であり、ほぼ近い値であることから、これらの住居址は2世紀前半中頃から、3世紀中頃といえる。

H56号住居の炭化米が入っていた壺は、赤色塗彩され、胴上部は球胴化し、胴下位に稜線をもつ。少し反って底部に至るものである。また大形の壺は口縁が短く強く外反し、頸部の文様が櫛描簾状文と赤色塗彩の帯びをほどこしている。小山編年の弥生後期箱清水後半にあたる土器群である。高杯の低脚化は見られるが小型の器台・高杯は出土していない。H33号住居は、H51・H56号住居より西のブロックにあり、床下には古い住居プランがあつて、拡張がなされたことが窺える。この住居は南が区域外であり、北側の1/3を調査したのみで、全長はわかっていないが、短軸長747cmを測り、本遺跡北一本柳遺跡Ⅲでは最大規模とみられる。

鉄斧は北西隅の壁の窪みに2本重なって出土している。

鉄斧は長いものが長さ18.6cm、幅4.6cm、厚さ1.0cm、407g、短いものが長さ13.2cm、幅4.6cm、厚さ1.0cm、196gを測る。

土器の杯類は赤色塗彩され口縁が内湾する。炉に使用された壺胴下部は外稜をもたずに内湾気味に底部に窄まる。土器は良好なものはないが小山編年弥生後期箱清水後半とみられる。

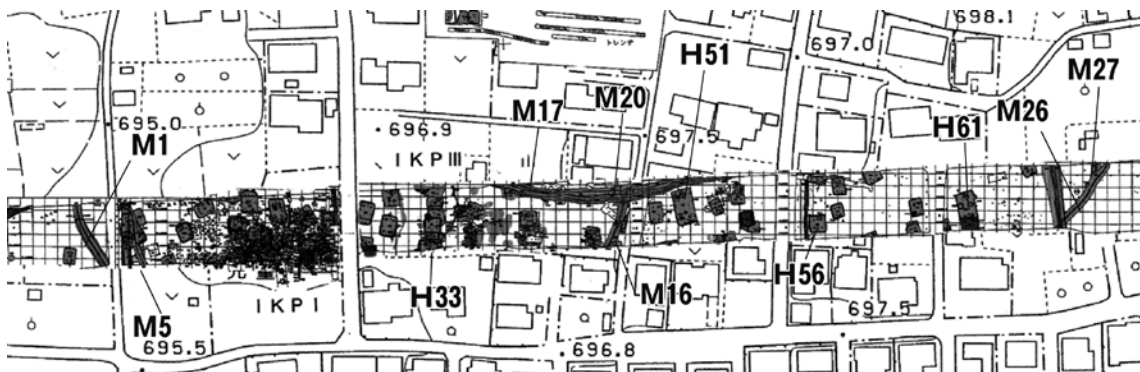


図1 北一本柳遺跡Ⅲ 全体図 (1:2,000)

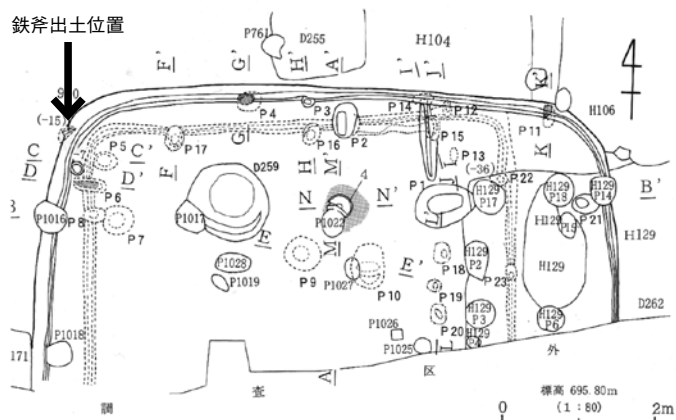


図2 H33号住居



写真Ⅰ H33号住居 西より



写真2 H33号住居 鉄斧出土状況

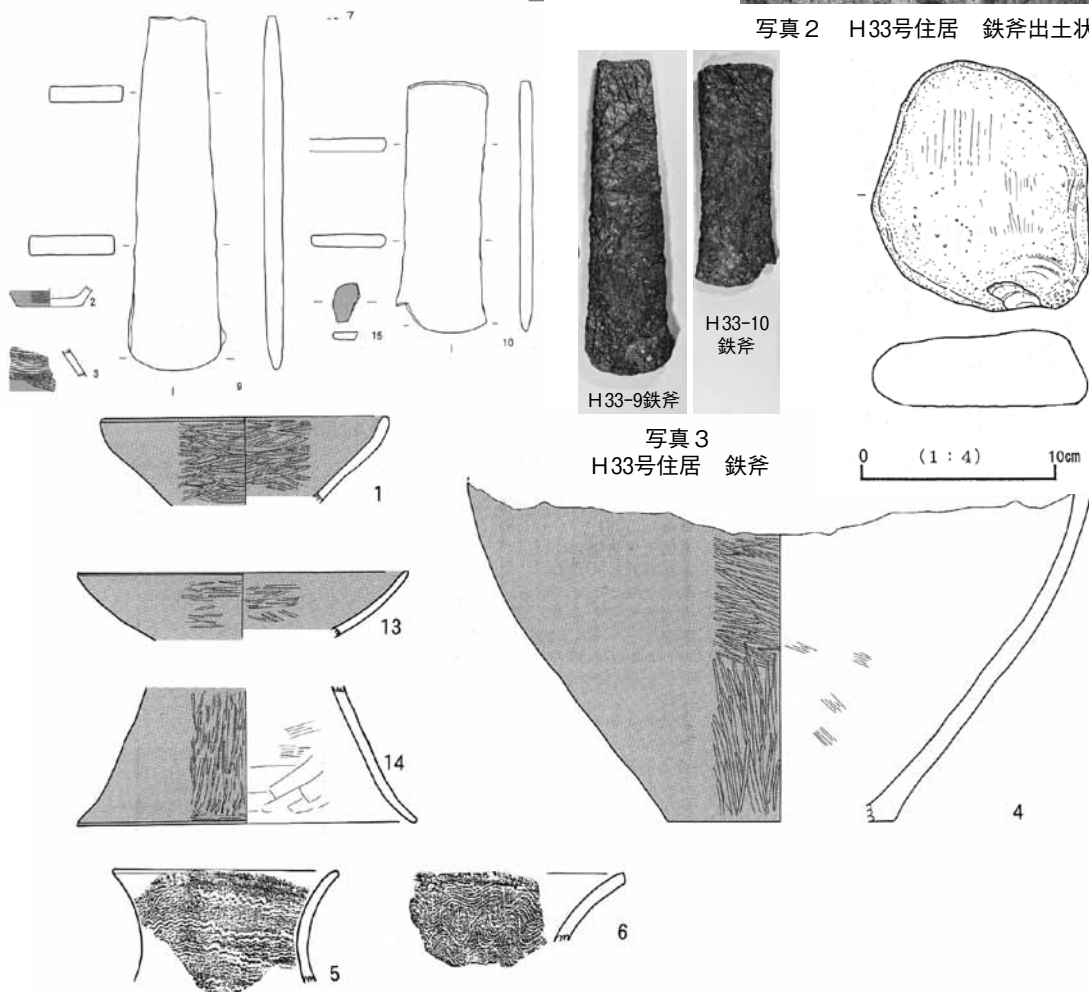


図3 北一本柳遺跡Ⅲ H33号住居出土遺物

佐久地域における弥生時代の出土金属製品について

富沢 一明

佐久地域は上信越自動車道の建設工事を皮切りに、長野新幹線、幹線道路網の整備、今また中部横断道の建設など1990年代から大型開発が20年近く続き、大規模発掘が続いた。結果、膨大な考古学資料が蓄積され、現在も整理作業が進められている。

今回、すでに報告となった資料を中心に、いまだ未整理であった佐久地域の弥生時代の金属製品について集成した。対象時期は弥生時代と古墳時代前期前半頃までの資料とし、当該期の遺構より出土したものをまとめた。ただし、報告書内で他時期の混入と記載されている資料は除外し、「混入の可能性」とあるものは務めて掲載した。また時期については報告書に記載のあるものはそれを転記した。

集成結果は掲載表の通りである。鉄製品と銅製品が同一遺構から出土している場合もあるが、集計すると鉄製品が出土した遺跡は32遺跡、遺構数は68遺構でいずれの遺跡も住居址出土が多い。銅製品については11遺跡で14遺構から出土している。こちらも住居跡が多

い。これら遺跡の立地は明らかに偏りが見られ、いわゆる田切台地末端から湯川の河岸段丘上に立地する長土呂・岩村田地域の遺跡が圧倒的に多く、出土地の核を形成している。その他の遺跡としては後家山遺跡を中心とする滑津川流域と分布は散漫となるが野沢平に出土地点が見られる。

出土品の種類としては、鉄製品が剣・鉄鏃・鉄斧・鎌・刀子・釧等があり、特に北一本柳遺跡Ⅲ出土の鉄斧は舶載品と考えられており、また、後家山遺跡出土の螺旋形鉄釧は太さの異なる釧を重ねて使用しており注目される出土例となっている。銅製品については鏡・釧・鏃の三種類で、釧の出土量は目を見張るものがある。破片出土も計数としたが上直路遺跡の21点や五里田遺跡7点は一遺跡の出土量としては異例と言えよう。また、耕作中の発見であるが社宮司遺跡の多鈕無文鏡は東日本出土唯一のものである。

金属製品出土遺構の時期については弥生中期からと考えられるが、詳細に見ると中期とした遺跡や遺構は不時発見であったり、遺構覆土からの出土等の例が多い。また、五里田遺跡の鉄剣と鉄釧についても、中期栗林期の集落と後期箱清水期の墓域が重なっており、遺構の深さも浅いことから重複や混入の可能性が捨てきれない。このように見ていくと佐久地域における金属製品の確実な導入は後期の吉田段階と考えた方が現段階ではよいのではないだろうか。ただ、後期段階でも金属製品保有の集落・集団は限定されていたことが今回の集成表からは垣間見れる。

雑駁なまとめとなったが、集成表を第一の成果として現段階のまとめとしたい。

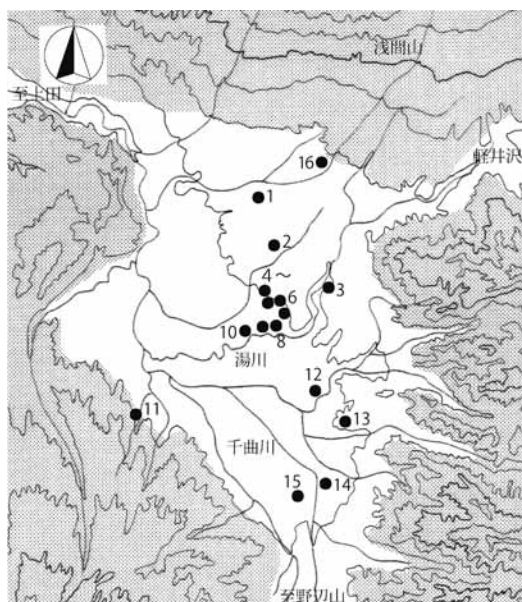


図1 佐久地域 金属製品出土遺跡位置図

1. 竹花
2. 和田原
3. 腰巻
4. 宮の前
5. 周防畑
6. 上直路
7. 門正坊
8. 西一本柳・北一本柳
9. 北西の久保
10. 五里田
11. 榛名平
12. 深堀Ⅳ
13. 後家山・東久保
14. 難山
15. 社宮司
16. 下荒田



図2 五里田遺跡の鉄剣
(報告書より転載)

出土鉄製品一覧表

遺跡名	遺構名	品名	数量	時期	備考	報告書
社宮司遺跡	土器埋納	鉄斧	1	弥生中期?		
久瀬添遺跡	H27号住居跡	棒状鉄製品	3	弥生後期	混入の可能性	佐久市97集
榛名平遺跡	IH13号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期末		佐久市84集
後家山遺跡	H4号住居址	鉄鏃	3	弥生後期		佐久市121集
	不明	不明	4	弥生後期		
	H36号住居跡	不明	1	弥生後期		
	H51号住居址	剣先	1	弥生後期		
	不明	不明	2	弥生後期		
	H52号住居址	刀子	1	弥生後期	混入の可能性	
		鏃?	1	弥生後期		
	H55号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期		
	不明	不明	1	弥生後期		
	H65号住居址	角釘	1	弥生後期		
東久保遺跡	1号木棺墓	螺旋形鉄釧	2	弥生後期		
	H1号住居跡	鉄鏃?	1	弥生後期		
	H2号住居跡	鉄板	2	弥生後期		
	H3号住居跡	鉄鏃	4	弥生後期		
深堀遺跡Ⅳ	H9号住居址	刀子	1	弥生後期		佐久市102集
西一里塚遺跡群	SM14号円形周溝	鉄剣	1	弥生後期	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	SM07木棺墓	螺旋形鉄釧	1	弥生後期		
	SB09号住居	壺状鉄製品	1	弥生後期		
北一本柳遺跡Ⅲ	H1号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期後葉		佐久市175集
	H3号住居跡	楔	1	弥生後期後葉		
	H21号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期後葉		
	H33号住居跡	鉄斧	2	弥生後期後葉		
	H51号住居址	剣	1	弥生後期後葉		
	H69号住居跡	鉄軸	2	弥生後期後葉		
		鉄軸	1	弥生後期		
	M20号溝状遺構	鉄鏃	1	弥生後期		
北一本柳遺跡Ⅱ	H2号住居跡	不明鉄	1	弥生後期		佐久市年報14
西一本柳遺跡Ⅷ	M6号溝状遺構	鎌	1	弥生中期		佐久市109集
		釘?	1	弥生中期		
西一本柳遺跡Ⅹ	H11号住居址	不明	1	弥生中期		佐久市127集
	H43号住居址	刀子	1	弥生中期	混入の可能性	
西一本柳遺跡ⅩⅢ	H9号住居址	鉄鏃	1	弥生後期前半	判断保留	佐久市139集
西一本柳遺跡ⅩⅧ	H20号住居址	刀子	1	弥生後期末		佐久市190集
	H22号住居跡	不明品	1	弥生中期		
北西の久保遺跡1次	Y60号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期		佐久市
	Y48号住居跡	鉄軸	1	弥生後期		
	Y14号住居跡	角釘	1	弥生中期	混入の可能性	
五里田遺跡	H1号住居跡	鉄剣	1	弥生中期		佐久市74集
	H2号住居跡	鉄剣	1	弥生中期		
	H5号住居址	鉄釧	8	弥生中期		
上直路遺跡	Y2号住居址	鉄釧	1	弥生後期		佐久市年報6
直路遺跡Ⅲ	SM2号周溝墓	刀子	2	弥生後期		佐久市110集
清水田遺跡Ⅱ	H2号住居跡	刀子	1	弥生後期		佐久市110集
		鉄鏃	1	弥生後期		
円正坊遺跡Ⅵ	H4号住居址	鉄鏃	1	弥生後期		
	H25号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期の古い段階	年報15	佐久市年報15
	H31号住居跡	不明鉄	1	弥生後期の新しい様相		
	H36号住居跡	不明鉄	1	弥生後期の古い段階		
円正坊遺跡Ⅷ	H28号住居址	刀子	1	弥生後期Ⅱ		佐久市185集
		鉄鏃	2	弥生後期Ⅱ		
	H37号住居跡	鉄剣	1	弥生後期Ⅱ		
	H39号住居跡	針?	1	弥生後期Ⅰ		
松ノ木遺跡Ⅲ	H12号住居跡	鉄鏃	1	古墳前期		佐久市223集
若宮遺跡Ⅳ	H3号住居跡	鉄軸	1	弥生後期		佐久市198集
宮の前遺跡Ⅰ	H27号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期		佐久市198集
		鉄鏃	1	弥生後期		
	H84号住居址	鉄軸	1	弥生後期		
	OT17号周溝墓	螺旋形鉄釧	1	弥生後期		
大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ	H1号住居跡	鉄製品	1	後期後半	検出面	佐久市156集
周防畑遺跡群	26号住居跡	鉄鎌	1	弥生後期	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	52号住居跡	刀子	1	弥生後期		
	53号住居跡	刀子	1	弥生後期		
	77号住居跡	刀子	1	弥生後期		
近津遺跡群	SB5009号住居跡	刀子?	1	古墳前期前半	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	SB7004号住居跡	鉄棒	1	古墳前期前半		

出土鉄製品一覧表No.2

遺跡名	遺構名	品名	数量	時期	備考	報告書
下小平遺跡	Y1号住居跡	不明	4	弥生後期		佐久市
		鉄鏃?	1	弥生後期		
	Y4号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期		
	Y5号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期		
腰巻遺跡	H5号住居址	鉄片	1	古墳前期中葉	上信越自動車道	長野県埋蔵文化財センター
藤塚遺跡Ⅲ	H3号住居跡	鉄斧	1	古墳前期中葉	カクラン内	佐久市26集
和田原遺跡	H4号住居址	鉄鏃	1	古墳初頭		小諸市13集
		鉄片	1	古墳初頭		
竹花遺跡	SB13号住居跡	鉄軸	1	古墳前期		小諸市17集
	SB72号住居跡	U字鉄製品	1	古墳前期		
下荒田遺跡	Y3号住居跡	刀子	1	弥生後期		御代田町

出土銅製品一覧表

遺跡名	遺構名	品名	数量	時期	備考	報告書
社宮司遺跡	土器埋納	多鈕無文鏡	1	弥生中期?	耕作中に発見	
離山遺跡	土器棺墓の可能性	銅釦	4	弥生後期?	昭和2年道路工事で発見	南佐久郡の考古学的調査
北一本柳遺跡Ⅱ	H2号住居跡	銅釦	1	弥生後期		佐久市年報14
	D1号土抗	銅釦	1	弥生後期		
北西の久保遺跡2次	Y87号住居址	銅釦	1	弥生後期前半		
五里田遺跡	2号円形周溝墓	銅釦	7	弥生後期		佐久市74集
上直路遺跡	Y1号住居跡	銅釦	21	弥生後期	破片含む	佐久市年報6
下伯母塚遺跡	H8号住居跡	銅鏃	1	弥生後期		佐久市110集
清水田遺跡Ⅱ	H2号住居跡	銅釦	5	弥生後期		佐久市110集
円正坊遺跡Ⅵ	H31号住居跡	銅鏃	1	弥生後期の新しい様相		佐久市年報15
	H25号住居跡	銅釦	2	弥生後期Ⅲ古		佐久市185集
円正坊遺跡Ⅷ	H39号住居跡	銅釦	1	弥生後期Ⅰ		
	21号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	5067号土抗	銅釦	3	弥生後期		



西一里塚遺跡群 S M14号円形周溝墓出土鉄剣



西一里塚遺跡 SM07木棺墓出土鉄剣



後家山遺跡 1号木棺墓出土鉄釦



宮の前遺跡Ⅰ OT1号周溝墓出土鉄釦

図3 佐久地方出土の金属製品（報告書より）

佐久地域後期弥生土器の編年と 北一本柳遺跡の年代

小山 岳夫

1 はじめに

過去に佐久地域の後期弥生土器編年を行った⁽¹⁾が、15年を経過し、空白の後期初頭ははじめ良好な新資料が続出した。ここでは旧稿を補足するとともに、北一本柳遺跡後期弥生集落の年代について考察する。

2 新資料による後期編年の整理

後期Ⅰ期＝吉田期前半は従前該当資料がなかったが、西一本柳・円正坊遺跡で良好な資料が出た。直路遺跡1住出土土器を栗林式土器最終末とすると、壺は受口が多く、胴部最大径の上昇と最大径比率の縮小に伴う形態のスリム化が目立つ。栗林式の特徴である懸垂文と頸部縄文地文によるヘラ描沈線及び胴部施文が消失、頸部に文様が収斂されて櫛描文優位となる。前代からの直線あるいは簾状と波状文を組み合わせる頸部を多段に周回する文様と鋭利な工具で鋭く刻まれる鋸歯文が継承され、ヘラ描スリットによるT字文が出現する。赤彩品は少ない。甕は口縁部が直立気味で球胴に膨らむものと口縁～胴部が弓状に反り胴部上位に最大径を有する肩の張る2系統が代表的で、口縁部はいずれも前代から始まった伸長化が顕著となる。文様は櫛描文のみで以下の時期も不変である。口縁端部に櫛描波状文が巡るものが多く、その下は頸部の櫛描等間隔止め簾状文の直上まで無文で、胴部は櫛描波状文が多段に施される。高坏は鐔状の口縁部をもつものが増加し、前代よりも大きくなる。

後期Ⅱ期＝吉田期後半 後期Ⅰ期の壺の腰高の形態から胴部最大径が若干下降し、安定した形になる。文様は口縁端部への施文がみられなくなり、頸部のみに施される。Ⅰ期以来のヘラ描スリットのT字文、櫛描横羽状文帯の上部に櫛描波状文・下部に鋭利なヘラ描鋸歯文を加飾するもの、直線か簾状文と波状文を組み合わせる頸部を多段に周回するものがある。頸部に鋭利なヘラ描沈線の矢羽状文や櫛描横羽状文が現れる。赤彩は漸増するが少ない。甕形態は前代の2系統を継承するが、いずれも胴部の張りが緩くなる。口縁部の波状文充填が定着し、口縁・胴部は波状文か横羽状文、頸部は2連止め簾状文が多い。高坏はⅠ期よりも大きくなる。ここまで、「コ」の字重ね文の台付甕が残存する。
後期Ⅲ期古＝箱清水期前半 胴部下半に稜をもつ壺が

出現し、赤彩が顕著となる。前代から鋭利なヘラ描鋸歯文・矢羽根状文とヘラ描スリットのT字文は継承され、斜格子文・1単位の櫛描スリットのT字文が加わる。甕の形態・文様はⅠ期以来の2系統を継承、高坏は大型化が達成される。周防畑B遺跡の坏下部に稜をもつ高坏は佐久地域では稀有な例である。

後期Ⅲ期新＝箱清水期前半 胴部下半に稜をもつ壺が定着し、甕は2系統の形態差がなくなり口縁から胴部が弓状に反る形態に統一される。文様は壺においては1単位の櫛描スリットのT字文と矢羽根状文、甕は頸部に簾状文、口縁・胴部には波状文か横羽状文が施される。壺の矢羽状文、甕の横羽状文は古墳前期Ⅱ期まで残存する。これは長野盆地、上田盆地にはない佐久地域固有の現象である。中部横断道建設関連発掘調査の西近津遺跡に充実した資料がある。

後期Ⅳ期古＝箱清水期後半 壺胴部幅の拡張に伴い、口縁から胴部への反りが強くなり全体的に肥った形態となる。壺に比べ甕の胴部幅の拡張は少なくⅢ期新からの大きな変化はないが、胴部最大径が中位から下位に下がる形態の甕も見られる。壺文様は、T字文の櫛描スリット2単位構成のものが加わり、その上位に簾状文帯を加えるものや下位に2条の波状文帯を加えるものなどT字文単体で飾る壺は減る。高坏はⅢ期新よりも低脚化する。

後期Ⅳ期新＝箱清水期後半は、従前はⅤ期として下小平遺跡出土品を充てていたが、小型高坏などが共伴するため、今回古墳初頭に繰り下げ、新たに西一本柳遺跡環濠・住居址資料を用いⅣ期新とした。壺・甕ともにⅣ期古よりも口縁・胴部の横幅が拡張し球胴化が進む。壺は受口状の口縁部も目立つようになり、受口端部外面には波状文が施される。頸部文様は櫛描スリット2単位のT字文が定着し、簾状文・波状文が単独で施されるものや、T字文に付加される例がみられる。Ⅳ期古・新のヘラ描矢羽状文については、未確認であるが、古墳前期Ⅰ期の中平・田中島遺跡において壺の頸部文様での使用が確認されているため、Ⅳ期にも存在していた可能性が高い。高坏は低脚と小型化が顕著である。

古墳前期Ⅰ期古は、弥生土器色が色濃く残る段階で弥生後期Ⅳ期新との形態差、文様差は少ないが、甕は前代よりも胴部幅が拡張し、肥った形態を示すものが多くなる。在来の低脚化した高坏に加え、欠山系の高坏や東海系の器台、S字甕A・B類などが少量加わる。辻の前遺跡9住194.195のヘラケズリが施された土器は畿内系であろうか。佐久地域では出土量が少ない北陸系土器が出土している軽井沢町県遺跡出土資料も弥生系甕の特徴からこの段階と考える。

古墳前期Ⅰ期新は、前代同様欠山系の高坏やS字甕B類などが在地の壺・甕ともに出土する。弥生系土器は

前代よりもさらに壺・甕は頸部屈曲がきつくなり球胴化が進行する。佐久地域ではこの段階でハケ調整の甕は少なく、在地の弥生系の文様が色濃く残るが、波状文よりも横羽状文を多用する傾向がみられるのは、ハケ調整を強く意識しているようにも思える。

古墳前期Ⅱ期は図示しないが、小型高坏・器台と共に小型丸底壺・鉢が加わり、畿内系の影響も看取されるようになる。弥生系土器は壺・甕ともに頸部が「く」の字状に屈曲し完全に球胴化したものがみられるようになる。

3 他地域との併行関係

吉田～箱清水式土器は、他地域の土器との共存が少なく併行関係をたどることは難しいが、その前段階の栗林式土器は北陸～南関東の土器と共存し畿内の第Ⅲ～Ⅳ様式まで併行することが判かりつつある⁽²⁾。また、後段階の古墳時代初頭は列島規模で土器が動く時代であるため、他地域との併行関係がつかみ易く、佐久地域の古墳前期Ⅰ期新の土器は、畿内の纏向Ⅲ式⁽³⁾（庄内式の末か布留式の最古段階）に併行する。よって吉田～箱清水式土器の他地域との併行関係は、前後の時代の土器から推察することができ、吉田期は畿内Ⅴ様式、箱清水期は第Ⅴ様式～庄内式に概ね併行すると考えられる。

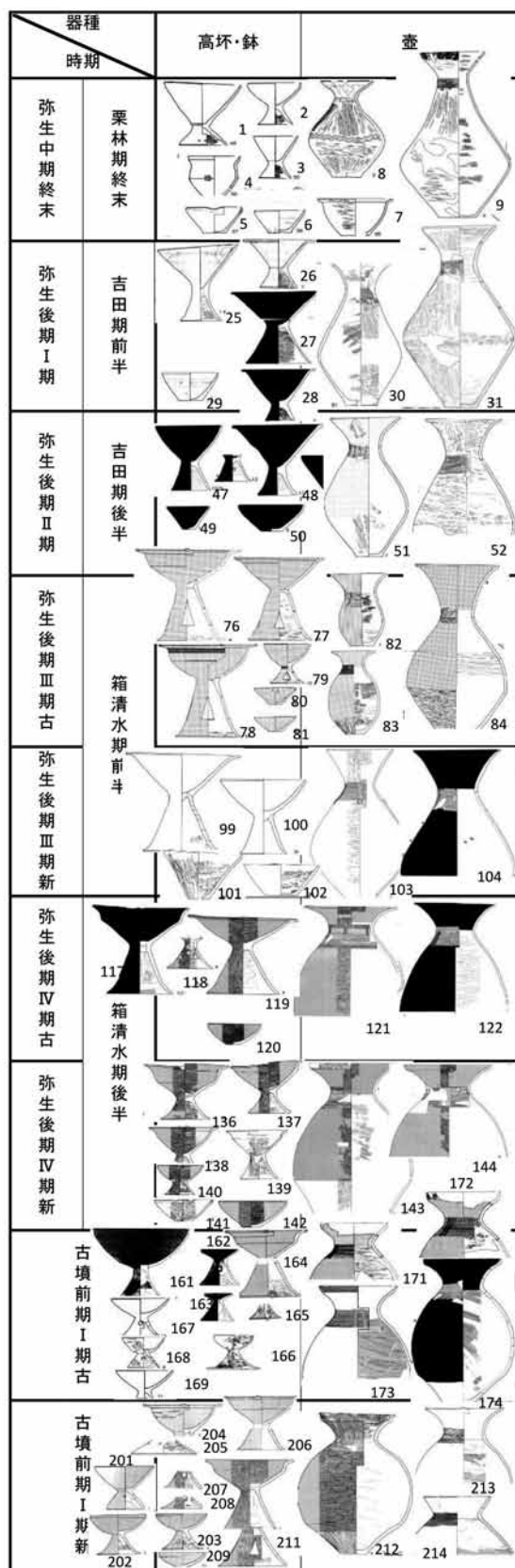
4 北一本柳遺跡後期弥生住居址のAMS法による高精度C14年代測定結果

板状鉄斧出土の北一本柳33住は、年代測定していないが、同時期と見られる同遺跡56・61住炭化物の暦年較正結果は、56住イネ胚乳が137calAD～223calAD、61住マメ類種子が130calAD～214calAD・クリの炭化材が83calAD～209calADであった。

5 小結

佐久地域の後期弥生土器を6時期に編年した。弥生後期が紀元前後から西暦250年頃と仮定すると単純割で1時期40年程度になる。現段階で峻別はできないものの、同時期内での住居址に重複や接しすぎている例もあることから各時期2小期以上の変遷はあるだろう。北一本柳遺跡については、西暦2世紀頃から3世紀前葉頃まで構えられた佐久地域最大の集落で、魏志倭人伝中の邪馬台国の時代と重なる部分もある。

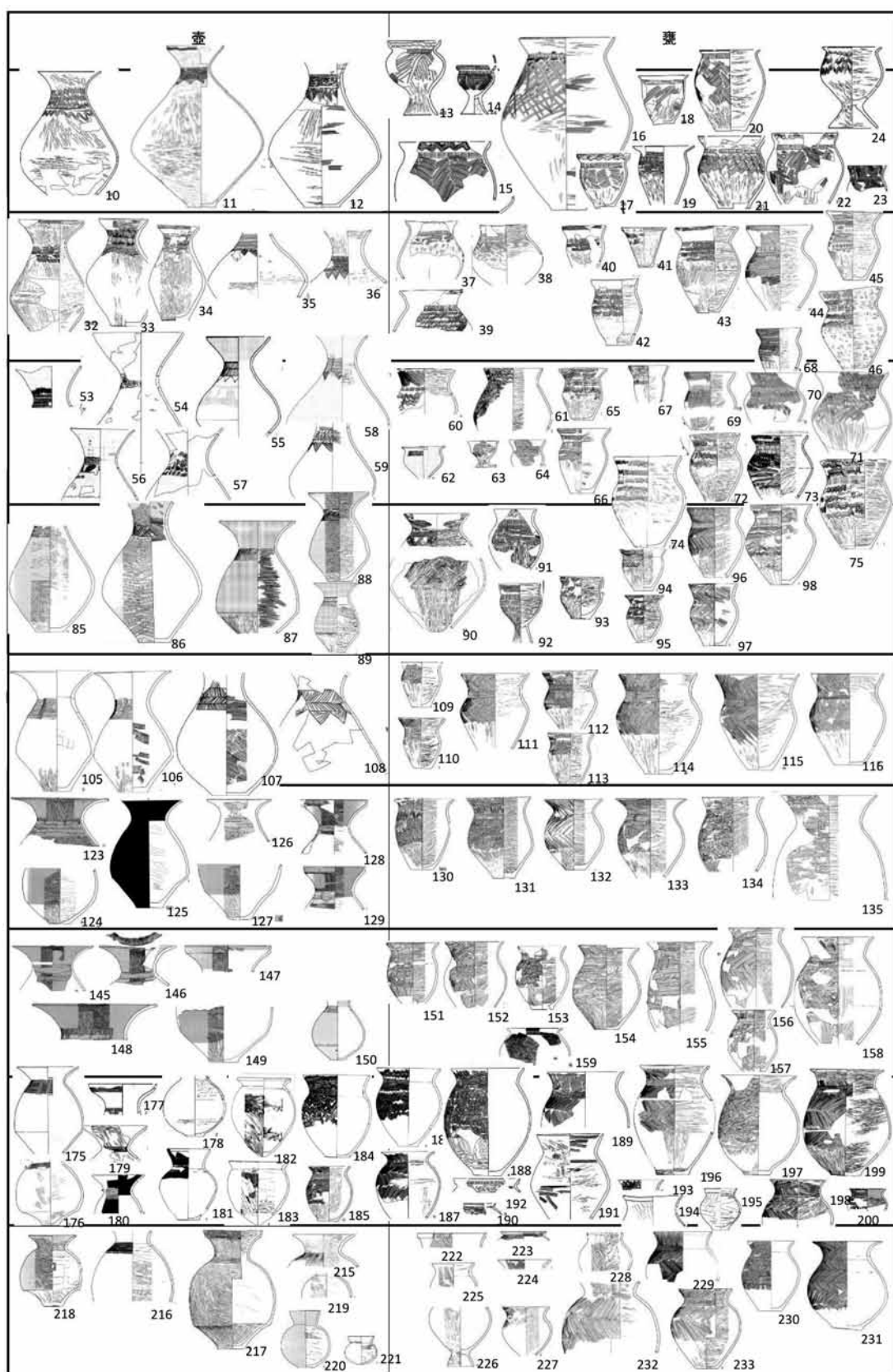
図1 佐久地域後期弥生土器編年図



(1) 小山岳夫 1999 『99シンポジウム長野県の弥生土器編年』

(2) 石川日出志 2013 「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『柳沢遺跡』

(3) 富沢一明 2004 「長野県 東信地域の古墳時代前期土器要素と外来系土器について」『専修考古学』第10号



朝鮮半島南部地域における板状鉄斧

—嶺南地域を中心に—

高久 健二

1. はじめに

長野県佐久市北一本柳遺跡H33号住居址から2点の板状鉄斧が出土した。1点はほぼ完形品であり、両側縁は基部から刃部へと直線状に広がり、刃部は弧状を呈している。横断面は長方形を呈し、縦断面は基部から身部へと厚くなり、刃部は両刃になっている。全長18.6cm、刃部幅4.6cm、厚さ1.0cmである(図1-1)。板状鉄斧は全長13cm以下・刃部幅4cm以下の小型、全長13~22cm・刃部幅4~7cmの中型、全長23~32cm・刃部幅5~10cmの大型、全長30cm以上・刃部幅10cm以上の超大型に分けられるが〔金度憲2004〕、これは中型に属する。もう1点は刃部の一部が欠損しているが、前者よりも小型であり、やや薄い。身部の両側縁がほぼ平行であり、刃部付近が広がっている。残存長13.2cm、最大幅4.6cmであり、中型と推定される(図1-2)。板状鉄斧は朝鮮半島でもとくに東南部の嶺南地域で集中的に出土している。H33号住居址の年代は弥生時代後期と推定されていることからみて、原三国時代後期の板状鉄斧と関連するものと考えられる。以下では、嶺南地域における板状鉄斧の様相を整理し、北一本柳遺跡出土の板状鉄斧の類例について考察してみる。

2. 板状鉄斧の出現

近年、板状鉄斧が普及する以前の小型短冊形鉄斧の出土例が増えている。初期鉄器時代後半(前2世紀前半)の慶山市林堂洞FⅡ-33号墳(木棺墓)では、勒島式の粘土帯土器とともに短冊形鉄斧(全長7.4cm)が出土している(図1-4)〔嶺南文化財研究院1999〕。原三国時代初頭(前2世紀後葉~前1世紀前葉)の大邱市八達洞57号墳(木棺墓)では、組合式牛角形把手付壺や黒色磨研長頸壺などとともに、鑄造鉄斧、鉄短剣、鉄矛、鉄鏝、鉄鉞、短冊形鉄斧(全長7.3cm)が出土している(図1-5)〔嶺南文化財研究院2000〕。同様な短冊形鉄斧は近年、慶州市北吐里6号墳、慶州市下邱里D地区4・11・15号墳でも出土している。これらの小型短冊形鉄斧は刃部が片刃のものが多くことからみて、扁平片刃石斧と同様な機能をもつものと考え

られる〔金度憲2004〕。したがって、板状鉄斧とは機能が異なるが、板状鉄斧の普及以前に存在した最初の板状の鍛造鉄斧として注目される。これと同じ小型短冊形鉄斧は佐久市社宮司遺跡でも出土している(図1-3)。多鈕鏡片が共伴している点も半島の場合と時期的な矛盾はなく、注目される資料である。

3. 板状鉄斧の変遷

前2世紀後葉~前1世紀前葉になると、嶺南地域で板状鉄斧が出現する。慶州市朝陽洞5号墳(積石木棺墓)では、黒色磨研組合式牛角形把手付壺や巾着袋形壺などとともに、鉄戈、鉄短剣、環頭刀子、鉄矛、鑄造鉄斧、板状鉄斧、鉄鎌などの鉄器類が副葬されていた〔鄭聖喜ほか2003〕。板状鉄斧は両側縁が基部から刃部へと直線的に広がり、横断面形は長方形を呈し、刃部は両刃である。全長14.7cm、刃部幅5.5cm、厚さ1.5cmで、中型に属するが小さい(図1-6)。

前1世紀中葉~後葉になると、嶺南地域で鍛造鉄器が普及し、板状鉄斧の副葬も急速に増加する。昌原市茶戸里1号墳(木棺墓)では板状鉄斧15点が副葬されていたが、そのうち3点は木柄に装着された状態で出土しており、縦斧と鉞の両方に使用されていたことが明らかとなった〔宋義政ほか2012〕。板状鉄斧の形態は、両側縁が基部から刃部へとゆるやかな弧線を呈しつつ幅が広がり、刃部は弧状を呈している。厚さは0.7~0.9cmと薄く、横断面は長方形を呈し、刃部は両刃になっている。全長21.2~27.6cm、刃部幅は6.6~8.4cmであり、中・大型が主体である(図1-7)。

後1世紀後葉の慶州市舎羅里130号墳(木棺墓)では、木棺内に板状鉄斧61枚が7列に敷き並べられていた〔朴升圭ほか2001〕。形態的には茶戸里1号墳のものと大きな違いはないが、厚さは0.8~1.7cmとやや厚いものが多い。全長23.9~28.0cm、刃部幅6.1~7.5cmであり、大型が主体を占める(図1-8)。

後2世紀前半の朝陽洞60号墳は小型木槨墓であり、装身具類、鉄製武器類・農工具類、轡、土器類が副葬されていた。板状鉄斧は8点が出土したが、形態はやや幅が狭く、刃部が広がるもので、それ以前のものと異なっている。全長22.4~25.8cm、幅4.1~5.5cm、厚さ1.7~2.5cmの中・大型である(図1-9)。

後2世紀後葉になると、嶺南地域で大型木槨墓が出現し、板状鉄斧の様相も変化する。金海市良洞里(東)162号墳は大型木槨墓であり、後漢鏡や小型仿製鏡などとともに、大量の鉄製武器類・農工具類が副葬されていた〔林孝澤ほか2000〕。板状鉄斧は被葬者を取り囲む四隅に10点1束にまとめられて置かれていた。その形態は身部の両側縁が平行で、刃部が広がり、幅が狭く厚みがあるもので、棒状鉄斧や柱状鉄斧ともよば

れるものである〔孫明助2012〕。全長25.5～29.3cmの大型である（図1-10）。同時期の蔚山市下垈44号墳も大型木槨墓であり、槨内から棒状の板状鉄斧10点が並べられた状態で出土している〔李在賢ほか1997〕。全長27.8～30.6cm、刃部幅3.9～4.5cm、身部幅2.8～3.1cm、厚さ1.5～1.9cmの大型である（図1-11）。これら棒状の板状鉄斧は朝陽洞60号墳出土の板状鉄斧の系譜上にあり、後2世紀後葉～3世紀初頭の限定された時期にみられ、10点を単位として大型木槨墓に副葬されていたことがわかる〔宋桂鉉1995〕。

後3世紀前葉～中葉になると、木槨墓はさらに大型化し、板状鉄斧は再び幅広のものが副葬されるようになるとともに、大型が主体を占めるようになる。下垈2号墳は大型木槨墓であり、装身具類、鉄製武器類・農工具類、土器類が副葬されていた。板状鉄斧10点が

出土し、形態は両側縁が基部から刃部へと直線的にゆるやかに広がり、刃部は扇形に広がる。全長27.5cm、刃部幅6.2cm、厚さ0.9cmの大型である（図1-12）。良洞里（東）280号墳も大型木槨墓であり、板状鉄斧10点が被葬者の頭部側に並べられていた。形態は身部の両側縁が平行で、刃部が広がり、横断面は幅が広い長方形を呈する。全長25.8～26.9cmの大型である（図1-13）。良洞里（東）235号墳も大型木槨墓であり、板状鉄斧30点が被葬者の頭部側に3列に置かれていた。形態は良洞里（東）280号墳のものよりさらに幅が広くなり、刃部も薄く、鉄斧としての機能を失った、いわゆる板状鉄斧形鉄器とよばれるものに変化している（全長30.2cm）（図1-14）。板状鉄斧形鉄器の用途については、貨幣価値をもつ鉄素材説〔東潮2006〕、貨幣説〔宋桂鉉1995〕、僻邪具・宝器などの非実用品説〔村

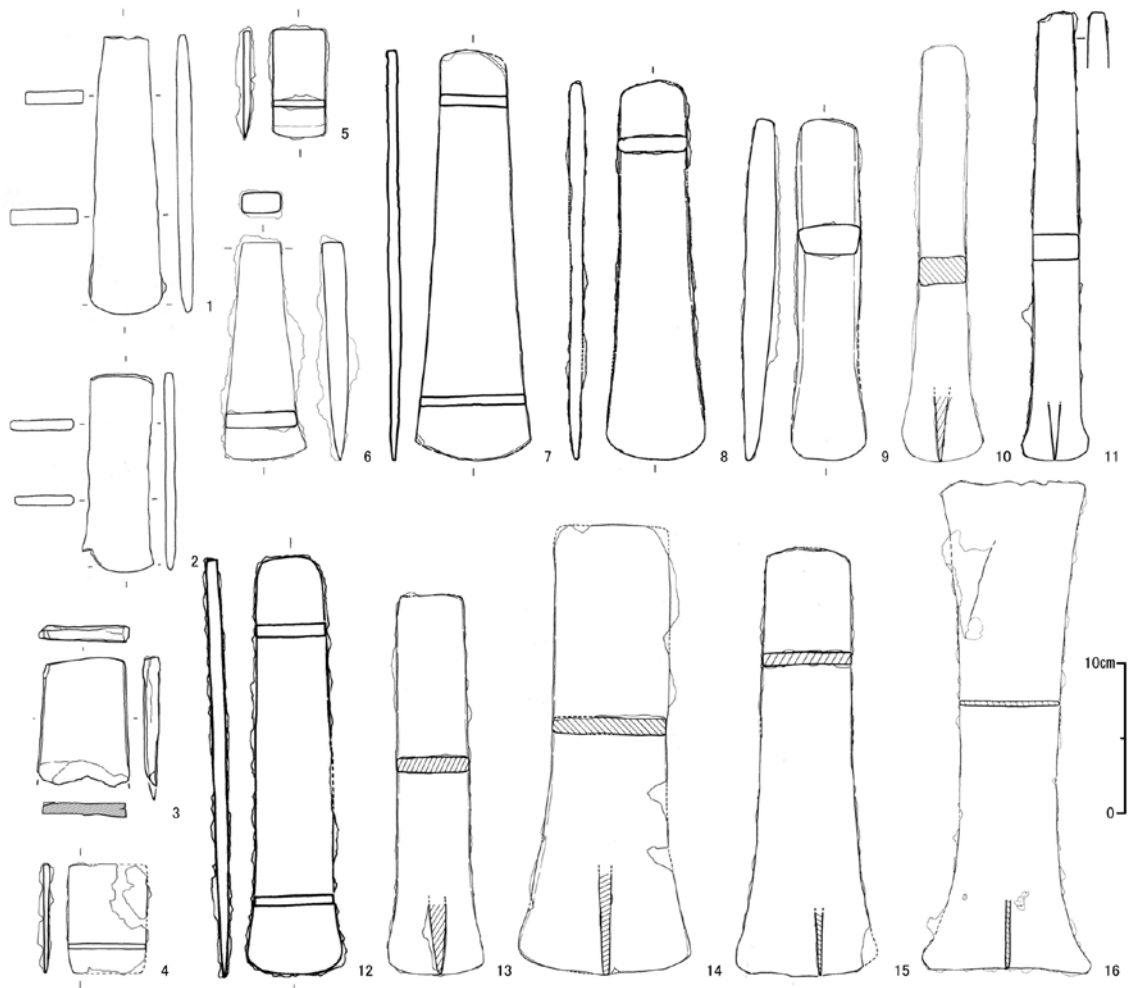


図1 板状鉄斧・板状鉄斧形鉄器・鉄鉞

1・2.北一本柳遺跡H33号住居址 3.社宮司遺跡 4.林堂洞FⅡ-33号墳 5.八達洞57号墳 6.朝陽洞5号墳 7.茶戸里1号墳
8.舍羅里130号墳 9.朝陽洞60号墳 10.良洞里（東）162号墳 11.下垈44号墳 12.下垈2号墳 13.良洞里（東）280号墳
14.良洞里（東）235号墳 15.大成洞29号墳 16.大成洞3号墳

上2007] などがある。

後3世紀後葉の金海市大成洞29号墳では、被葬者の頭部側に合計91点の板状鉄斧が敷き並べられていたと推定され、その形態はやはり刃部が薄くなった板状鉄斧形鉄器であった〔申敬澈ほか2000b〕。全長25.7～32.1cm、身部幅5.8～7.5cm、厚さ0.5～1.1cmであり、大型品が主体を占める（図1-15）。さらに、後4世紀中葉の釜山市福泉洞38号墳からは板状鉄斧形鉄器20点が出土したが、その形態は刃部幅が大きく広がり、全体の厚さが同一で薄い〔宋桂鉉ほか1997〕。全長36.4cmの超大型であり、板状鉄斧形鉄器から鉄鋌への過渡期的な形態を示している。次の4世紀後葉の大成洞3号墳では、基部幅が広がった典型的な鉄鋌（全長32.5cm、中央部幅6.6cm、厚さ0.4cm）が副葬されており（図1-16）、ほぼ4世紀中葉頃に境に板状鉄斧形鉄器から鉄鋌へと変化したことがわかる〔申敬澈ほか2000a〕。

4. 結語

最後に北一本柳遺跡出土の板状鉄斧の類例について検討してみる。2点の板状鉄斧うち、身部の両側縁が基部から刃部へと広がるもの（図1-1）については、両側縁が平行で刃部が広がるものより古い特徴を有している。すなわち類例としては、茶戸里1号墳や舍羅里130号墳があげられるが、時期差が大きい。後2世紀後葉は板状鉄斧の空白期であるため、不明確であるが、後3世紀前葉～中葉の下垵2号墳や良洞里（東）280号墳のように刃部が広がるものが出現する直前段階に該当するものと推定される。つぎに身部の両側縁が平行で、刃部が広がるもの（図1-2）については、良洞里（東）280号墳のように、板状鉄斧形鉄器になる直前段階のものと類似する。したがって、北一本柳遺跡の板状鉄斧は、いずれも後200年を前後する時期のものと推定され、『三国志』魏書・東夷伝に記された「弁辰の鉄」を象徴的に示す鉄製品といえるだろう。

参考文献

- 東潮2006『倭と加耶の国際環境』吉川弘文館
金度憲2004「고대의 관상철부에 대한 검토 - 영남지역 분묘 출토품을 중심으로 -」（古代の板状鉄斧に対する検討－嶺南地域墳墓出土品を中心に－）『韓國考古學報』53
申敬澈ほか2000a『金海大成洞古墳群Ⅰ』研究叢書第4輯、慶星大學校博物館
申敬澈ほか2000b『金海大成洞古墳群Ⅱ』研究叢書第7輯、慶星大學校博物館
宋義政ほか2012『昌原 茶戸里 1～7次 發掘調査 綜合報告書』古蹟調査報告 第41冊、國立中央博物館
宋桂鉉1995「洛東江下流域의 古代 鐵生産（洛東江下流域の古代鉄生産）」『加耶諸國의 鐵（加耶諸國の鉄）』加耶研究叢書1、仁濟大學校 加耶文化研究所
宋桂鉉ほか1997『東萊福泉洞古墳群 - 第5次 發掘調査 99～109號墓 -』研究叢書第12冊、釜山廣域市立博物館
孫明助2012『韓國 古代 鐵器文化 研究』진인진（チニンジン）
鄭聖喜ほか2003『慶州 朝陽洞 遺蹟Ⅱ』學術調査報告 第13冊、國立慶州博物館
朴升圭ほか2001『慶州舍羅里遺跡Ⅱ - 木棺墓、住居址 -』學術調査報告 第32冊、嶺南文化財研究院
村上恭通2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
李在賢ほか1997『蔚山下垵遺蹟 - 古墳Ⅰ』研究叢書 第20集、釜山大學校博物館
柳渭男2009「삼한시대 영남지역 출토 주조철부와 관상철부 연구（三韓時代嶺南地域出土鑄造鉄斧と板状鉄斧研究）」『嶺南考古學』第51號
林孝澤ほか2000『金海良洞里古墳文化』學術叢書7、東萊大學校博物館
嶺南文化財研究院1999『慶山林堂洞遺跡Ⅰ - F, H地區 및 土城（F, H地區および土城）-』學術調査報告 第18冊、嶺南文化財研究院・韓國土地公社
嶺南文化財研究院2000『大邱八達洞遺蹟Ⅰ』學術調査報告 第20冊、嶺南文化財研究院

小山岳夫論考（P 8、P 9） 挿図土器遺跡一覧

編年図 No1～24直路1住、25.37.39西一本柳Ⅲ116住、26.31西一本柳Ⅲ7住、27.28.44西一本柳ⅢX27住、29.32.35.36.38西一本柳Ⅲ41住、33.34西一本柳Ⅲ4方形墓、47～50.63.64.69～71円正坊Ⅷ23住、51.58.66.67北西の久保66住、52～54.57.60.65西一本柳Ⅲ60住、55.73北西の久保56住、56.74.75西一本柳Ⅲ117住、59.61北西の久保123住、62.68北西の久保79住、76～81.83.89.90.95周防畑B2周、82.87.92周防畑B1周、84.91.94周防畑B13住、85.88.93.96周防畑520住、86周防畑523住、97.98周防畑801住、99～103.105～116上直路1住、104円正坊Ⅷ30住、117.122.125.130.131円正坊Ⅷ36住、118.119.121.123.124.126.133.134北一本柳Ⅲ6住、120.128.129.132.135北一本柳Ⅲ51住、136.137.139～141.143～145.151～153.155.157～160西一本柳Ⅲ12溝、146.147西一本柳Ⅲ46住、148.149.154.156西一本柳Ⅲ37住、150西一本柳ⅢV11住、161～163根乃井大塚、164.165.179下小平2住、168.171.172下小平3住、198～200下小平4住、167～168.193～195辻の前9住、169.177.187～191辻の前14住、178.192辻の前13住、166.196.197池畑2住、174.176円正坊Ⅷ1方形墓、173.175.186下伯母塚3住、181～185堺1住、201～203.220～225中平・田中島1方形墓、215中平・田中島2方形墓、207.208.211.217.226.232近津SX5002住、210.212.218.219.227.233近津SB4002住

弥生時代後期・佐久市 北一本柳遺跡出土鉄斧 の歴史的意義

石川日出志

はじめに

弥生時代中期に長野県北部域を中心に分布する石戈類を1980年代から追跡している。中野市柳沢遺跡で出土した銅戈との関係もあり、2011年11月1日（火）に佐久市埋蔵文化財センターを訪れ、同市北裏遺跡と西一本柳遺跡出土の石戈を観察した。初見の北裏例は新たに実測し、西一本柳例は以前の図を修正した。その際に、調査中の周防畑遺跡群宮ノ前遺跡も見学する機会を得たのに加えて、森泉かよ子・富澤一明両氏から佐久平の弥生時代後期の遺跡群について解説して頂き、その威容にあらためて感嘆した。夕方遅く実測を終えて帰る間際に、北一本柳遺跡の発掘調査報告書を閲覧し、2点の板状鉄斧に目が留まった。大形住居跡(H33号)のコーナーの壁に、あたかも壁龕(niche)のような窪みを設け、そこに鉄斧2点を重ね置く、特異な状況が詳しく報じられていた。しかも朝鮮半島南部製品の形態的特徴を備えている(図1-1・2: 森泉2010)。数日後、高久健二氏に図面をお送りし、半島製品とみてよい旨ご教示頂いた。

本稿では、この2点の板状鉄斧をめぐる歴史的な意義を考えてみたい。

1. 朝鮮半島系板状鉄斧の類例

北一本柳遺跡H33号住居跡で出土した2点の鉄斧に伴った土器群は、箱清水式土器後半期に属すから、おおむねAD2世紀後半を前後する年代を目安値としてよい。高久氏が、本誌掲載論考で2点の鉄斧をAD200年前後に位置づけることと大きな齟齬はない。

本資料との関連でまず注目すべき事例は、新潟県三条市経塚山遺跡第3号住居跡で出土した板状鉄斧である(図1-3: 金子1999)。長さ13.9cm・最大幅3.6cm・最大厚1.2cmを測り、断面形で明らかのように、4側面がつくる稜が明瞭に角張る。かつて村上恭通氏に情報提供し、本例も朝鮮半島製品と考えるのが適切であるとのことご教示を得ている。本誌高久論文図1-6の朝陽洞5号墳例と比べると、最大厚が経塚山例では中央にあるが、朝陽洞例は頭部という違いはあるものの、平

面形や稜の明瞭な点はよく似る。身幅に比べて肉厚である点も、日本列島各地にみられる板状鉄斧との顕著な違いといえよう。

経塚山遺跡は、新潟平野の東縁をなす東山丘陵上の標高60~85mに立地する高地性集落で、弥生時代後期後半(V期後半)に限定できる。北陸の法仏式系の譜をひく土器群が伴っている。法仏式系土器は長野盆地でも箱清水式土器に伴うから、北一本柳遺跡例とほぼ同時期と判断してよい。

ところが、長野県北部と新潟県中越地域に朝鮮半島製板状鉄斧が検出されているにもかかわらず、現状では、北陸や北近畿・山陰というその想定される搬入経路上の地域に類例を見出すことはできない。したがって、この2遺跡3例を著しく例外的な存在とみてしまいそうだが、そうではない。

2. 長野県内の弥生時代後期の朝鮮半島系金属器

北一本柳遺跡の鉄斧2例以外にも、千曲川流域には朝鮮半島系文物が数例みられる。まず第一に、本誌No108(2011年)で再検討結果が特集された佐久市社宮司遺跡の多鈕無文鏡片は明らかに朝鮮半島製品の再加工品であるが、筆者は中期後半の栗林期に帰属するとみる。弥生時代後期後半の実例としては、下高井郡木島平村根塚遺跡で出土した渦巻飾付鉄剣(2号鉄剣: 図1-7: 木島平村2002)を筆頭に挙げるべきであろう。渦巻飾は加耶(狗邪韓国)地域一帯に特有であることから、彼地の製品とみられる。長さ74cmという長剣であることも、半島製品とみる有力な根拠とし得る。しかし、把の軸が剣身から若干屈折する点と、剣身側で枝部(渦巻飾)が派生する特徴は、東日本に特徴的な鹿角製把頭と共通する。把部と渦巻飾の両者を統一的に理解するために、豊島直博氏は特注品の可能性を指摘する(豊島2003)。なお、2号および全長56cmの1号、全長47.4cmの3号の3点の鉄剣の金属的調査を実施した大澤正己・影山英明両氏は、いずれも高温還元炒鋼法が採用されているとして朝鮮半島製とみなす(大澤・影山2002, 大澤2002)。

上田市上田原遺跡I区第40号土坑出土の鉄矛(図1-6: 清水1996)も朝鮮半島製品とみられる。共伴土器はないが、全長26.6cmのうち身部長が14.4cmと短身であるから、弥生時代後期併行とみてよい。さらに、長野市浅川端遺跡の青銅製馬形帯鉤(図1-4: 清水・風間2005, 風間2006)も、7世紀後半の土器を伴うが、その特徴は明らかに朝鮮半島南部製品で、弥生時代後期後半併行期に帰属する。

すなわち、長野県内では、木島平村・長野市・上田市・佐久市と千曲川流域一帯に点々と朝鮮半島南部で

製作された鉄器と青銅器の出土例があり、いずれも弥生時代後期後半であることは重要である。

3. 朝鮮半島系文物が流入する経緯

根塚遺跡2号鉄剣が特注品であるとする、東日本に伝統的な把形態を指定できるのは当然東日本地域であり、発注者は東日本内ということになる。渦巻飾をもつ鉄製品は、いまだ日本列島内では他に実例が発見されていないことも、特注品の可能性を考えるのに大きな力となる。もちろん、こうした朝鮮半島南部の製品が千曲川流域にもたらされるには、〔朝鮮半島南部←→北部九州←→山陰←→北近畿←→北陸←→千曲川流域〕という広域間の情報と物資の流れが整備されていることが必要条件となる。そしてこうした広域連携は、中野市柳沢遺跡の青銅器群や栗林式土器の形成をみれば弥生時代中期段階にも認めることができるが、なお不安定で、後期前半にも存在したかは明確ではない。むしろ、弥生時代後期後半に急速に整備されたと考えるのが妥当であろう。

図1-5は、長野盆地の北隣にある高田平野の西縁部の丘陵上に位置する高地性集落・上越市裏山遺跡で出土した鉄製鋤鋏先である。大形の鉄板の両側縁を折り曲げて刃先とする簡便なつくりである。かつて北部九州の弥生時代後期に特徴的と考えられてきたが、近年は鳥取県青谷上寺地遺跡や妻木晩田遺跡など山陰地域でも類例が増えている。それでも北陸では石川県塚崎遺跡などわずかししか検出例がなく、裏山遺跡で6点も出土したことは注目される。この遺跡も、箱清水式と併行する法仏式土器の段階に属す。しかしそれ以上に広域連携を明瞭に示すのは、鉄剣および墳墓における鉄剣を主とする武器の副葬習俗の広域普及である。

鉄剣は、佐久市でも五里田遺跡H1・2号住居跡、北一本柳遺跡ⅢH51号住居跡、円正坊遺跡ⅧH37号住居跡、西一里塚遺跡群SM14号円形周溝墓で検出例がある。関東地方でも群馬県有馬遺跡や新保田中村前遺跡などの礫床木棺墓や、埼玉県観音寺遺跡などの方形周溝墓の主体部や周溝内埋葬などの副葬品として検出されている。長野県内や関東地方の分布状況を見ると、千曲川流域から群馬県方面、そこからさらに南関東や東関東方面へと分布が形成されたと考えられる。

そして千曲川流域への流入経路を考えると、直接の流入もとは高田平野であり、さらに北陸、北近畿、山陰と、日本海沿岸部を西にたどっていくことができる。ざっくり言ってしまうと、そもそも、墳墓に鉄剣を主とする鉄製武器を副葬する習俗は朝鮮半島南部に顕著なもの。これが弥生時代後期後半に、中国地方から北陸へと分布を拡大しており、その延長線上に千曲川流域や関東の鉄剣副葬習俗の普及があるとみられる。も

しろん、鉄製武器でも鉄刀の副葬は中国漢代の習俗が朝鮮半島経由で日本列島にも広まり、鉄剣副葬習俗に重なり、概して鉄剣よりも鉄刀が上位層に副葬される傾向がある。このように鉄製武器副葬は、弥生時代後期後半に日本海側を中心として、東北地方を除く弥生文化圏内に広まった習俗であることに注目したい(図2：林2002)。

4. 弥生時代後期後半という時代と本資料

長野県北部：箱清水期≡北陸：法仏期は、それ以外にもいくつかの注目すべき事象が認められる。北陸では、社会的緊張に対応する集落である高地性集落が、福井県域から新潟県域北部まで広範囲に構築されている。長野県内でも、北陸と連動する高地性集落として中野市がまん淵遺跡が営まれている。また、後期前半にいったんは見られなくなった環濠集落がふたたび現れ、中期後半には見られなかった居住域を包囲する環濠も篠ノ井遺跡群で確認できる。篠ノ井遺跡群が後期後半に大規模化するのと歩調を合わせるかのように、佐久平では集落の飛躍的拡大が認められる。北一本柳遺跡は西一本柳遺跡と約50mの間において隣接し、北一本柳遺跡は小山岳氏氏によると東西370m・南北200mほどを環濠が全周するという。北一本柳遺跡は佐久平の弥生後期集落群のなかでも中心的な位置を占める環濠集落である可能性が高い。朝鮮半島系板状鉄斧2点を出土したH33号住居跡は、環濠集落の中央からやや南西寄りの位置にある。堅穴住居跡の北端だけが検出されたが、短軸長が7.47mを測るので、本遺跡で検出された堅穴住居跡で長軸長・短軸長ともつかめる住居規模を参考にすると、H33号住居跡の長軸は12～14mにも及ぶと復元でき、本遺跡で最大規模となる。板状鉄斧が、堅穴住居跡の埋土ではなく、コーナーの壁面に穿たれた壁龕状施設に2点重ねられており、何らかの意図のもとに置かれたとみてよい。このように、飛躍的に拡大した集落群、そのなかの中核的集落、そのなかで最大規模の堅穴住居跡で、特異な状態で出土したことに、直ちにその意味は読み取れないとしても、重要な意味があるともみるべきである。

弥生時代後期後半という段階は、中国地方では岡山県桶築墳丘墓や島根県西谷3号墓など突如際立った規模の墳丘墓が出現し、そこには木槨という大陸に由来する埋葬施設も採用されている。西谷3号墓には、吉備の特殊壺・特殊器台だけでなく、北近畿や北陸系統の土器もみられ、葬送儀礼に遠隔地の首長層も参画したことが推測されるように、遠隔地の有力首長層が相互に連携を図る状況が読み取れる。ちょうどその時期に、朝鮮半島から大量の鉄素材が日本列島にもたらされ、各種の鉄製品も流通する。それまでの弥生社会と

は質的に異なる広域に互る物資と情報の交換が本格化し、それに立脚して遠隔地間の政治的連携が生まれ始めたのである。

佐久市北一本柳遺跡の2点の板状鉄斧は、単に佐久平に朝鮮半島系文物が確認されたことを意味する訳ではない。大陸とも連携するこのように整備された広範な物資と情報の交換体制が、単に西日本だけではなく、北陸からさらに長野県域や関東までも及ぶ時代状況を、明確に物語る重要資料だと考える。

【補記】図1・2は図1-6以外は本文中に提示した参考文献から引用した。図1-6は上田市立信濃国分寺資料館所蔵資料で、寺前直人氏の原因を石川がトレースした。

【参考文献】

- 東 潮 2003「韓と倭の馬形帯鉤」『檀原考古学研究所論集』第14巻, pp.193-215
- 大澤正己・影山英明 2002「根塚遺跡出土弥生時代後期鉄剣の金属学的調査」『根塚遺跡』木島平村教育委員会, pp.112-133
- 大澤正己 2002「根塚遺跡K区出土鉄剣の金属学的調査」『根塚遺跡』木島平村教育委員会, pp.134-139
- 風間栄一 2006「馬形帯鉤の分類と系列把握—日本出土の馬形帯鉤をめぐって—」
- 金子正典 1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』新潟県三条市教育委員会
- 木島平村教育委員会 2002『根塚遺跡—墳丘墓とその出土品を中心に—』
- 小池義人ほか 2000『裏山遺跡』新潟県教育委員会
- 林 大智 2002「石川県における鉄器の導入と社会の変化」『平成13年度環日本海交流史研究集会 鉄器の導入と社会の変化』pp.42-55, (財)石川県埋蔵文化財センター
- 清水 彰 1996『上田原遺跡・塚原古墳群・下之条条里水田遺跡』上田市教育委員会
- 清水竜太・風間栄一 2005「長野市浅川端遺跡出土の馬形帯鉤」『考古学雑誌』89-2, pp.76-87
- 杉山和徳 2014「東日本における鉄器の流通と社会の変革」『記念シンポジウム資料集 久ヶ原・弥生町期の現在』pp.149-176, 西相模考古学研究会
- 豊島直博 2003「弥生時代の鹿角製鉄剣」『東国史論』18, pp.3-26
- 野島 永 2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書, 広島大学大学院文学研究科地表圏システム学講座
- 森泉かよ子 2010『西一本柳遺跡Ⅳ・北一本柳遺跡Ⅲ・東大門先遺跡Ⅱ・西八日町遺跡Ⅲ・西八日町遺跡Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書第175集

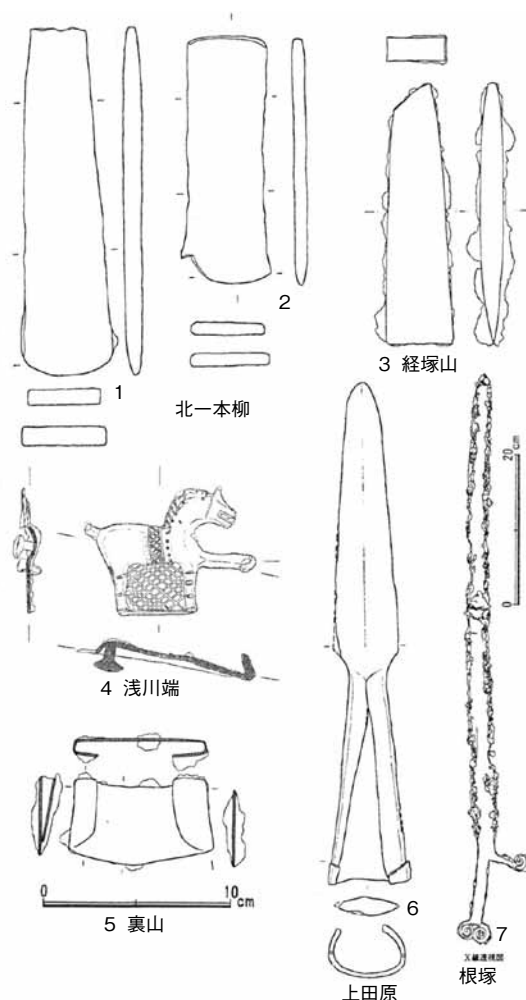


図1 関係資料

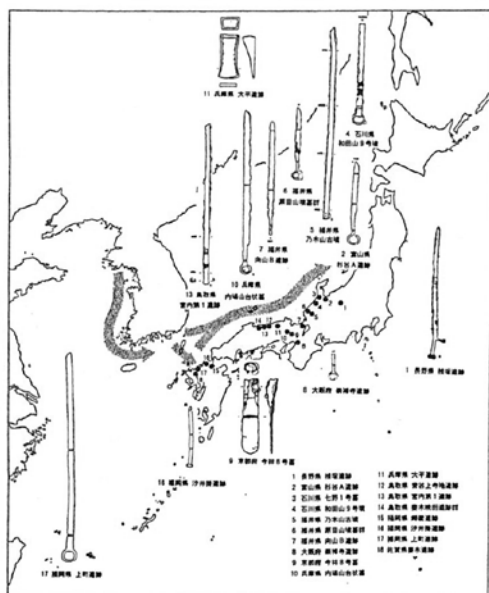


図2 弥生後期後半・末の主な舶載鉄器 (林2002)

佐久の弥生時代研究を創世した神津猛と藤森栄一

昭和11(1936)年戦前から佐久志賀の実業家神津猛は、岩村田駅近くで掘削された竪穴住居の断面から出土した朱塗りの赤い土器や刷毛目・波文の土器などを「岩村田の弥生遺跡」と題して郷土雑誌『信濃』に紹介した。同年諏訪の考古学者藤森栄一は信濃の弥生土器の体系化を図った論文を『考古学』に発表、岩村田出土の弥生土器は、弥生末期の「箱清水式」よりも一段階古く位置づけ「岩村田式」とした。「岩村田式」はその後神村透により「箱清水式」と同一として解消され、未だ復活していない。

しかし、昭和初期に2人の研究者が注目した佐久地方の赤い土器群とその文化の魅力は、現代の研究者の心を捉え、今回、およそ80年の歳月を隔てて再評価され始めている。(小山)



神津猛
(1882～1946)



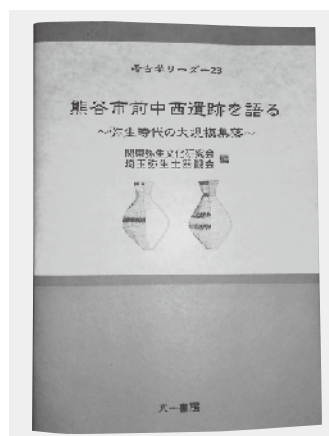
藤森栄一
(1911～1973)

『熊谷市前中西遺跡を語る ～弥生時代の大規模集落～』刊行！

埼玉県熊谷市で1996年から継続的に発掘調査されている前中西遺跡は、想定集落域30haという弥生時代中期後半の東日本屈指の大規模集落址である。これをめぐって平成25年9月25日明治大学リパティタワーにおいてシンポジウムが開催され、その成果をまとめた単行本が最近発刊された。

前中西遺跡では、北武蔵固有の縄文系土器「北島式」「前中西」式土器とともに栗林式土器や榎田型磨製石斧、当土器文化圏特有の墓制「礫床木棺墓」が見つかっており、当時の信州との強い地域間交流があったと見られる。関東の玄関口佐久平で弥生時代を研究しているとの理由から、不肖小山岳夫もこの本の執筆に加わせていただいた。信州の弥生時代研究者も必読の書としてここに紹介する。

◆A5／並製本／カバー装丁／290頁／3600円＋税
◆頒布問合せ 六一書房 TEL 03-5213-6161 FAX 03-5213-6160



♪ 編集後記 ♪

30年近く前、佐久市出土の「西一里塚遺跡の外来系土器」を持って、その出自がどこかを探るため関東の弥生研究者を訪ね歩いていったことがある。結局、よくわからずじまいであったが、検討の経過を文章にまとめて長野県考古学会誌に掲載した。その際にお世話になった一人が、当時埼玉県富士見市勤務の小出輝雄さんである。長い間、考古学をさぼっていた私は昨年、久しぶりに小出さんと再会した。当時のことを覚えていて下さり、前段で紹介した前中西シンポへの参加を勧めるとともに執筆の機会も与えてくれた。若き日の流離は、無駄でなかった。(小山)

佐久考古通信 No.113

発行所 佐久考古学会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井秀雄 方
郵便振替 00570-9-2842
☎ 0267 (32) 8922

発行日 2014年8月28日
発行者 桜井秀雄
編集者 小山岳夫
印刷所 ほおずき書籍(株)

